



東九州支部報



平成16年忘年会(12月18日(土) 杖立温泉「和風旅館泉屋」にて)

《 もくじ 》

津江山系の山々	1
雨男 晴れ男	3
立羽田から中の原山へ	3
内匠の池から鹿倉の峠へ	4
第3回青少年体験登山大会	5
平成16年登山記録	6
ガリゲンカト・トレッキング①	7
平成16年度年次晩餐会	8
碓氷峠	8
今西錦司①	9
私の無名山ガイドブック②	9
おすすめ映画	10
お知らせ	11
後記	11

津江山系の山々 十二月月例登山と忘年会

報告 加藤英彦

近年毎年恒例となっている重廣恒夫さんを囲んでの、暮れの月例山行と忘年会が、去る二月十八日(土)、一九日(日)、津江山系の三国山、国見山、酒香童子山と、そして忘年会は杖立温泉で行われた。

重廣さんの所属するアシックスの企画行事が、今年は「三県境の山に登る」となっており、全国に一八ヶ所ある三県境のピークのうち、九州では大分、福岡、熊本の三県にまたがる三国山が選ばれたのである。

この三県境トレッキングは四月の支部の総会で、二月の月例山行として予定されていたものであるが、この夜に忘年会も開かれることとなった。

二月十八日(土)

前夜最終便にて大分入りしていた重廣さんをホテルに出迎えて、車四台に分乗して大分を朝六時に出発。高速道路を走り出すころにはやや雨が激しく降り出す。九重インターにて一般国道に出て、宝泉寺温泉を経由して小国方面へと国道三八七号を快適にとぼす。

小国を過ぎ下釜ダムの橋を渡って国道四四二号に入り、栃原、中津江村役場を過ぎ、少し時間があるので鯛生スポーツセンターへ寄り道をして、サッカーグラウンドやカメルーン記念碑を見て、集合予定地の「道の駅鯛生金山」の駐車場へ。

ここですでに到着していた宮崎から参加の長友さん、福岡から参加の高島さん、すぐに到着した中野車、久留米にて小竹さんをひろって福岡からきた佐藤(秀)車と合流。

車が多いのでRV車四台にしぼって乗り換える。北九州から来る予定の日向さんは、連絡をとるも遅れているとのことで、待たずに出発。県境の竹原峠を越えて福岡県へ。この峠も現在トンネル工事中で、できあがればかなり短縮できそうだ。福岡県に入ると道路改良もトンネル工事とあわせてかなり進められている。この道を下っていけば、日向神ダムだが、虎伏木部落より左へ林道に入る。

中代島の小さな集落を過ぎ、一・七キロで山口の集落へ。ここをぬけ、溪谷の左へ林道が入っている。一カ所直進したためすぐに間違いに気づきUターン。林道終点に数台おける広場があり、ここに駐車する。
(次頁へ)

さあ登山開始だ。駐車スペース脇にて全員でストレッチ体操を、重廣さんの指導でしっかりと行う。

溪谷の左岸からスギ林の中へと登りにかかる。はじめは作業道だがすぐに赤テープを見て左(西)へ渡り、スギ林の道となる。風倒木で道をふさがれたりしながら、水源涵養林の標識がそばにある造林小屋の脇をぬけ、右手に古い炭焼き窯の跡をみて、やがて右手より林道の交差するところで小休止。

植林地から雑木林にかわり、約一〇分の急登で東西に延びる山口越の稜線にでる。ここからまず東の三国山へ。急坂の尾根を約一〇分で九五〇mをこえるクマザサの茂る尾根にかわり、ここから数分で山頂である。



(三国山山頂にて) せまい山頂にて記念撮影にヤ

ツホーと、恒例のセレモニー。重廣さん特別の垂れ幕が用意された撮影となり、カメラも数台と用意された撮影風景である。三県境の山頂は、大分・福岡・熊本とよく判別できる頂きである。

さてしばらく山頂を楽しんだあと、いったん山口越にもどり稜線を国見山へと向かう。縦走路ははっきりしており、雑木林の中のアップダウン道である。途中、左へ鬼の洞の岩峰への分かれ道を通ぎ、福岡・熊本県境のやせ尾根を西へ数分で尾根のピーク、さらに数分でピークを過ぎ、右手福岡県側からの道(茂田井ルート)と合流。これからロープのある岩峰の急坂を越え、最後はあっけなく国見の山頂に出る。



(国見山山頂にて) 万歳のセレモニーのあと昼食

となる。小竹さん手造りの弁当はいつも豪華で美味しそうだ。西(あずさ)は例によって皆んなにおしるこのサービスだ。昼食も終わり、出発しようとしていたら、北九州より参加の日向さんが遅れて到着。聞けば山ルートの中の林道が分からずに、戻って大分県側の宿ヶ峰尾峠より三国山を越えてとぼしてきたとのこと。再度日向氏を入れて万歳と記念撮影となる。

今朝早く発つて八方ヶ岳へ登って合流する予定の、飯田氏一行三名と携帯で連絡がとれた。彼らは今三国山頂で、これから一足先に今晚の宿に直行すること。我々も登ってきた縦走路を戻って山口越へ。ここで高島さんと園田さんの二人は日向さんの車のキーを預かって、三国山を越えて宿ヶ峰尾峠へと向かい、他の一行は山口へと下る。

駐車場に下ると本日の登山終了。一路鯛生へ。ここで今朝置いた車を回収し、しばらく待って高島さんの車と合流し、本日の宿の杖立温泉へ向かう。杖立温泉の「泉屋」には一足早く着いて、一杯やっていた飯田グループ、所用で山は欠の甲斐さんと合流。早速部屋割のあと風呂に入る。そして午後六時から忘年会である。忘年会は日田からの佐藤副支部長も合流して、全員で二八名の宴会だ。はじめに重廣さんから一言いただき、続いて乾杯の

音頭でしばしの懇談となる。このあと参加者全員が、自己紹介をかねて近況報告等を行う。宴は次第に盛り上がり、舞台では歌がでるようになりやがておひらき・・・。

十二月十九日(日) 朝食の後、これも恒例となっている、アシックスよりのプレゼント(Tシャツとバンドナ)をいただく。これが楽しみで参加するものもいるとか・・・。

七時過ぎに宿を出発し、小国で昼食の弁当を買い込み、鯛生経由で奥日田スーパー林道に入り、カシノキヅルの峠の広場に到着。上津江のフィッシングパークを経由して来る組がなかなか着かない。三〇分ぐらい待って到着。西、小竹、安部組は林道より直接地蔵峠へ先行したとのこと。

前日と同じように、ストレッチ体操の後出発。小鈴山への稜線の遊歩道入り口には「風倒木除去作業中につき通行止め」と書いてあった。しかし、今日は日曜日で作業もしていないし、風倒木除去作業はもうほとんど終わっている様子だった。ササ、スズタケ、雑木の中を急登して小鈴山を超えて、東に下っていくと地蔵峠だ。古ぼけたお地蔵様が道の左にある。スーパー林道が出来るまでのメーソールトであった、中川内からの登路は今ほとんど使われていなくて、廃道に近い様子だ。

地蔵峠から手前のピークを一つ越えて、最後の急登一〇分ほどであっけなく酒呑童子山頂に着いた。先行していた西組が山頂で出迎えてくれた。



(酒呑童子山山頂にて) 例によって三回目の山頂でのセレモニーをする。ここが今回最後の山頂で、撮影もラッシュである。まだ食事には早いので下山にかかる。途中、地蔵峠からスーパー林道に下り、後は林道を下りてくるとカシノキヅルの峠へ歩く。小鈴山を経由し忠実にピストンした四人組もいた。また、峠の手前よりハナグロ山への登路を数分登り、ガケから峠の広場に降りたが、遅れて登った佐藤(秀)君はそれを知らずに、そのまま忠実にハナグロ山まで登ったとのことである。 駐車場にて少し早い昼食をと

り、ここで解散となる。時間もあるので、ハナグロ山に向かった七名組と分かれて、重廣さんに乗せ、小国の岳ノ湯の共同浴場で入浴の後、九重インターより高速日出口C、空港道路経由で大分空港に送り、今回の山行を終えた。

雨男？ 晴れ男？

西 あずさ

年末と言えば、重廣さんをお招きしての忘年山行が恒例となりました。サガルマータ(エベレスト)のネパール名をはじめ、八千メートル峰を数多く征服された輝かしい功績は言うまでもなく、生で、身近で、当時のお話を伺える私達は、未知の世界へ誘ってくれるひとときに魅了されてしまいます。

二〇〇四年度は三県境シリーズで、大分・熊本・福岡の県境にまたがる三国山が目的での来県でした。ところが、前日の天気予報が思わしくありません。そうです、重廣さんと言えば大分では「雨男」と言われているのです。

そもそも、一九九九年ふるさと名山シリーズ、大船山の時のことです。大雨注意報どころか大雨警報が発令されました。飛行機は遅着するし、ずぶねれになりながらも、大船から平治岳まで歩き、「重廣さんは雨男かも」と囁かれました。

その後、二〇〇一年の分水嶺シリーズ、最初の北九州・足立山では、三月というのに、雷が轟き雨が雹に変わり、あつという間に山は真っ白の雪景色となり、重廣さんは雨ばかりか「嵐を呼ぶ男」とまで言われました。ご本人も「この季節(三月)に、九州で雪に見まわれるとは思っても見ませんでした」とのことです。

その年の忘年登山の黒岳は、初めて午後から、冬の柔らかい日差しに包まれました。ところが、翌週の背振りでは、路面凍結のため、博多側のアシックス・重廣隊と鳥栖側の私達大分隊は落ち合うことができず、山中のことで、携帯も通信状況が悪く、小竹さんが、重廣さんのために大量におでんを準備していたにもかかわらず、その夜は重廣さんの口に、おでんが入ることはありませんでした。

翌日、稜線で会えたものの、雪は深くなる一方で、下山後、十数台の車が凍結のため衝突し、立ち往生する事態に陥り、人海作戦でロープで車を引っ張り上げる椿事となりました。写真に

取めればよかったと気づいたのは、事態も収束しかけたときで、重廣さんも慌ててカメラを抱えていました。ともあれ、怪我人が居なかったことだけでも、幸いに思わなければならぬほどの一大事だった気がします。でも、怪我人が居なかったので、面白かったとも言えますが、詳しくは、参加した人にお尋ねください。多分、笑い話として語り継がれていくことでしょう。

引き続き二〇〇二年一月の本谷山も、雪景色の上にガスってしまいました。ここまで来ると「晴れるはずがない」と誰もが思い、重廣さんの「雨男」説は疑う人が居なくなりました。

ところが、二〇〇四年二月の冷水峠では、雨交じりの朝の集合に、誰もが「やっぱり雨」と思いきや、徐々に晴れ間がのぞき始めました。わーめずらしい、晴れてきました。

そして迎えた忘年登山の朝、予想を裏切ることなく、しよほしよほと冷たい雨です。もう、雨は勘弁してほしいと思いつつ、重廣さんと再会して、開口一番「また、雨ですわねー」苦笑するしかありません。それでも重廣さん曰く「今年の神戸の山行は全部晴れで、晴れ男と言われてるんですよ」ですって！「晴れ男ですか？大分でそれを信じる人は居ませんよ！外を見て言っしてほしいわ」と、心の中の私はぶつぶつと文句を言っ

てました。天気予報は「くもり」のはずなのに、雨なのは重廣さんのせいではないのでしょうか？あれっ、日田に近づくにつれて雨が上がリ、三国も国見も曇天です。翌日の酒呑童子を下る頃には晴れ間がのぞいていました。

さて、皆さんは重廣さんをも雨男だと思えますか？それとも晴れ男だと思えますか？

立羽田の峠から 中の原山へ

(二〇〇月月例山行報告)

園田 暉明

一〇月二四日(日) 午前五時にサニー・スポーツ出発のところが、目覚まし時計の不調で間に合わず、七時に国道二一〇号、玖珠町の牛の銅像横で合流することとなる。到着すると既に、当日のメンバーの飯田さん等五名が待っていた。

今回の山行も分水嶺踏査で、それも我が三班担当区域の一部、立羽田の峠から中の原山(中の原山の名称は定かでないが、二万五千分の一の地図「中塚田能原牧場」北側の標高七四〇m台の地域とする。)迄のコースで

ある。

実はこのコース、七月に、三班員の徳永昌弘さんと二人で立羽田側から下見をした時に、猛烈な藪こぎで諦めた箇所である。(反対方向の三角点五八四m地点等はその時に確認。)

終点となる中の原山の下、田能原牧場の奥の道路に車二台を置き、残りの二台で一旦小原部落まで下り、県道を通ってスタート地点の立羽田の峠に行く。

峠の最高点を五〇〇mほど過ぎた左側の空き地に車を止めて奥に入る。四m位の檜の植林地の中の、勾配のない踏み分け道を一〇〇mほど進むと分水嶺の鞍部に至る。

同地点から終点方向を眺めると、遙か先の間にあるピークに遮られその先は見えないが、スタート地点を除いては、竹や雑木等の生えるいわゆる藪山である。夏の下見時に比べ雑草の勢力が落ちており、今回は仲間も多いが、ピークまでの位かかるかと少し気になる。

七時五〇分スタート。思ったほどに草の抵抗はなく一〇分程で最初のピークへ。植林地はここで終わり藪となる。雑草が踏み分けられた獣道？を利用する等してあまり苦労せずに鞍部へ降りる。平らな草の少ない所で小休止。話がキノコや秋の野草に及ぶ。

イノシシのぬた場を過ぎ、更に下って行くと鞍部に分水嶺を

横断するように作られた古い林道に出る。牛の放牧等が盛んな時に作られた林道であるが、荒れ放題で車の通行も不能である。再び、反対の斜面に取り付く。ここからは完全な竹藪山である。

竹は丈三m程、弓矢作りに向くと思われ小さなもので、密生しており、いよいよ藪こぎかと覚悟をきめる。先頭員が竹を左右に分けて、一人がやっと通れる空間を作り、残りの全員がその後には続き、黙々と少しずつ進む。直ぐに汗が出てくる。時折りイノシシのものらしい獣道があり、これを使うと前進が楽となり、この時ばかりはイノシシに感謝。

悪戦苦闘すること約三〇分、再び林道に出る。林道から反対側の山に入ることになるが、二つの尾根があり選択に迷う。林道の下に暗渠があり、小さな谷を林道工事で埋めているのを発見。これにより左側が分水嶺と分かり取り付く。

前と同じ種類の竹があり、それも前以上に密生。台風の影響なのか倒れており、勾配も増して前進がいよいよ遅くなる。

「行けども、行けども竹、竹、竹！」三〇分程進むと平らな台地上となり、進むべき分水嶺がはつきりせず、飯田さんが木に登って地形を確認。

出発から二時間近く経つのに、コースの三分の一も進んでいな

いと内心穏やかでない。更に進むと、竹も少なくなつて茅が混じってくる。進行が楽になったことで安心し、小休止しようとしたが、なつた鞍部の左側に寄ると、なんと尾根の直ぐ下に、尾根に沿ってコンクリートの林道がある。

今までの竹藪での苦勞が空しくなる。林道を横切り、藪を分けると間もなく台地上のピーク六四七m地点に到着。ここで休憩。コースの約三分の一を制覇したことになる。



(石の祠)

下刈りのされた台地上の展望台で、眼下に早朝に通つた小原部落等が見える。ピークの中心地に高さ二mほどの石組の祠があり、石に「天保一五年 小原組、中原組、原口組」の文字。現在ある小原部落は小原組のこ

の山の頂上までよくぞ重い石を運び、造つたものだと言ひの信仰心の厚さに改めて敬服。この眺めのよい展望台で一休み。(一〇時〇〇分〜一〇時一五分)

ここからは多少の上下を繰り返しながら、分水嶺上に未舗装であるが、立派な林道が走っており、足が速まり会話も弾む。Y字型三叉路に至り、分水嶺上に延びる荒れた左の道を選び七一三mのピークを目指す。

分水嶺から道が別れることとなる峠で昼食休憩。(一〇時四〇分〜一一時一五分)この地点からさほど歩きにくい藪山に入り少し進むと、突然に、下草が刈られ檜の植林された原野に出て、視界が広がる。ここを右に折れ、藪山との境を登っていくとピークに至る。本日のコースの最高点、七一二mの三角点の地点である。

みんなで三角点を探すが見つからない。すると草の中に転がっていた長さ一m程の四角の石柱に気づき、見ると三角点の文字。林業の地ごしらえ作業の過程で掘り起こしたものであろうか。折れていないのがせめても

の幸いであるが、三角点に神聖性を感じている私にとっては誠に耐え難い、やりきれないものであった。放置された三角点を起し、抱きかかえるようにして、皆んなで囲み写真に収まる。(一一時

三〇分〜一一時四〇分)



(倒れた三角点を抱いて)

尾根に当たる山の斜面を下つて、林道へ。道脇の草むらに今日初めてのリンドウの花を見つける。(コースの途中で可憐な花をつけたセンブリを見つけたが詳細は都合により省略。)少し行くと分水嶺上を走っている舗装された道路に合流し、直ぐに朝方車両を駐車した終点に到着。(一一時一〇分)

今回のコースは、全行程の標高差約一五〇m、水平距離約二、五km 所要時間四時間二〇分(含む食事時間)であった。

他班の分水嶺調査に参加したが、今回藪こぎに苦しめられたことはなく、記憶に残る山行となつた。藪こぎのほとんどで先頭に立って頂いた飯田さんに深く感謝。

本県が担当する分水嶺踏査は、

一部の有名な山城を除けば、景色に恵まれてなく藪こぎも多いことから、決して愉快とは言えないが、全国一斉に行われる踏査の一部で、意義深いものと考えている。加えて、踏査の過程で、分水嶺上にある「〇〇越」等の名前の付いた、交通網の未発達であった昔の人の生活用道路をこの目で見て、その労苦を知ったことは、文明のただ中であつて、便利、快適を当然のものとして生きている我々にとつて、いろいろな面で、自分を振り返る良い機会となつたとも感じている。

参加者：飯田、安部、中野、長野、今山、園田

内匠の池から 鹿倉の峠へ

(十一月月例山行報告)

牧野信江

平成十六年十一月二十一日
(日曜日)晴。八名参加。朝五時サニーを出発。今回は西さんはネパールから帰つたばかりなので、めずらしく参加されませんでした。国道二一〇号線を玖珠まで行き、六時二〇分に黒牛

の銅像前で安部車、飯田車、中野車、佐藤秀二車が集合。

そこを右折し国道三八七号線に入り、さらに県道二八号に入
って鹿倉トンネルの手前から山
に入り、荒れた林道を数分
間、車でぼこぼこ登り、鹿倉ト
ンネルの西方の稜線に車を二台
駐め、後の二台に八名が分乗し
て、内匠の池に向かいました。
内匠の池につくと、池の畔に
は九州自然歩道の案内板が立っ
ており、とても景色の良いとこ
ろです。(名勝耶馬溪の「内匠
の景」指定地)



(内匠の池)

木々におおわれている見慣れた
山と違い、木があまりなく、長
方形の岩が山頂に並んで立っ
ているような山があります。

そこに着いた時、佐藤秀二さ
んの車のタイヤがパンクしての
で、スペアと取り替えたので

すが、皆の協力で手際よくでき
ました。

七時三〇分に出発。上下二つ
の池があり、上の池の堤防を伝
って道の向かい側の稜線にとり
つきました。雑木林を直登して
稜線に上がると、そこから先ず
北に向かいます。

日本山岳会創立百周年記念事
業の一つとして、日本の中央分
水嶺を踏査する計画があり、東
九州支部でも月例山行ではその
一部を歩くことにしております。
今回の場所は二万五千分の一の
地図で「深耶馬溪」の左下の部
分です。

分水嶺とは降った雨が左右に
分かれ流れる山脈のことですが、
中央分水嶺は分かれた水が下流
で同じ海に流れ込んでいてはあ
ってはまらないとのこと、今回
の場所は片方は玖珠川(筑後
川)で有明海(東シナ海)へ、
もう一方は山国川で瀬戸内海
(太平洋)に注いでいるため、
それにあたるとのことです。分
水嶺を書いてある大きな地図も
あるそうです。

道がないので最初からヤブこ
ぎです。男性軍がカマやナタで
枝を払って進みます。すり傷が
けっこうできました。

北に向かった稜線は三十分ほ
ど大きくカーブして東に向か
い、やがて稜線につけられた
古い林道を進むようになり、再
び大きくカーブして今度は南向
きに進みます。このカーブ地点

の北側にちよつと目を引く高く
とがった岩山が聳えていました。
五五一mの標高点のあるピーク
で、「登頂意欲がそそられるな
あ」と男性軍の声が聞こえまし
た。しばらく林道を南進すると
今度は東側の峰に向かつて山腹
を直登していきます。登り着く
とここからは、北に南にと稜線
は大きく曲がりくねりながら、
徐々に東の鹿倉峠へと近づいて
いくのです。

ヤブの浅い少し快適な稜線歩
きとなったためにどんだん南に
進んでいると、東側の稜線に渡
るべき地点を通り越してしまい、
Uターンです。朝の稜線に登っ
た時から右手に見えていた
山(通称「チョコ山」六〇三、
六m)が、このあたりまで絶え
ず右手に見え隠れしていて、こ
の山の周りを半周したような感
じです。

地図を見ながら山腹を直に下
ると、背の高い笹におおわれた
低い鞍部に下りつきました。飯
田さんが「ここも分水嶺の上な
んだ」といったその地点は、山
の中のただの窪地にしか見えま
せんでした。そこから東側の稜
線への登りが大変でした。縦横
に折り重なったスギの風倒木の
中のヤブこぎ登りです。平成七
年の台風十九号の時に倒れ、そ
のまま放置されているようです。

安部先生は半ばヤケ気味に
「楽しいヤブこぎだなあ」とい
っていましたが、「今年一番の

ヤブこぎ」だそうです。登りつ
いたらホッとするほどに浅いヤ
ブになりました。平らな稜線を
少し進んだところに明るい小広
場があり、時刻は十一時四十五
分、ここで昼食休憩となりました。

再出発の後は、少し行くと稜
線に残っている旧い道が現れ
て、あとはほとんど快適な林道
歩きとなりました。遠くになだ
らかな山並みが見えるようにな
り、やがて林道からそれて小さ
な尾根を二、三分で登りついた
ところが今日の最後のポイント
地点、五三七mの標高点です。

一二時四五分到着。ここで記念
写真を撮り、少し下ったところ
に今朝駐めておいた二台の車が
ありました。



(五三七mピークにて)

飯田さんをはじめ、皆さんの
地図を読む力と勘、中野さんの

携帯GPSのおかげで、ほとん
ど予定の時間通りに着くことが
出来ました。すごいなあと思い
ました。自分で地図を見ながら
目的地に着いたら達成感があつ
たでしょうが、悲しいかな後か
らただついて行くだけでした。

天気が良くて、皆で楽しい山行
ができました。最後は、二台の
車で内匠ノ池に戻り、そこで解
散しました。

参加者：安部、飯田、石川、佐
藤(秀)、園田、徳丸、中野、
牧野

第三回青少年 体験登山大会

西 孝子

平成一六年八月二十二日

(日)、午前七時大分駅前を貸
し切りバス一台に三十九人が乗
って出発。天気は晴天。バスの
中ではまず自己紹介。小学生で
も大きい声で、全員が紹介を終
える。湯布院の道の駅でトイレ
休憩。山の説明や中央分水嶺の
説明などをしていられるうちに牧
戸峠に到着。

直接自家用車で来た人たちも
そろって、ここで先ず四十五名
全員で記念写真撮影。宇津宮副
支部長のあいさつの後、準備体

操、今日のコース説明、登山上の注意などをすませて、九時二十分に出発。



(牧ノ戸登山口にて)

小学生と保護者のグループは加藤会員が、その他の組は飯田会員が先頭となって、二組に分かれて登り始める。支部員はザックに支部旗をつけて、隊列の随所について歩く。最後は救護班で宇津宮副支部長と西。この日の参加者は八十八歳から三歳まで、小学生二人とその両親、三歳と五歳の二人おチビさんとお父さんお母さん、近所のお姉さんと一緒の女の子等々。高齢の人も幾人か・・・。天気は薄曇りで、いつもぼんやりと太陽が見え、ほどよい登山日和。絶え間なく吹く風が心

地よい。沓掛山から続く稜線道には、大会参加者の長い列が断続的に続いている。扇ガ鼻の山腹、みどりの斜面には今盛りのノリウツギの花が、白い点々を見せている。「まるでミカン畑みたいだね」と誰かの声。十一時五分、先頭より「たまたま久住別れ到着」とトランシーバーの声。最後尾はまだ星生山への分岐の手前である。体力の差だ。

久住別れでいったん全員がそろい、十一時二十分再出発。一人だけ、久住別れまでであきらめるが、あとは全員が久住山頂へと急ぐ。

十一時四十五分、先頭より「久住山頂到着」とトランシーバー。十五分ほどで全員が山頂にそろい。一人のけがもなく。記念撮影で写ったこの満足げな顔、顔、顔・・・、気ままなポーズ・・・。自然は人の心を洗ってくれる。九州本土最高の地より三六〇度の眺め。

昭和四十年頃までは、一等三角点のまわりはしっかりと草と土に守られていたが、今は土から浮き上がり、まわりは石ころだらけ。久住別れまでも草がなくなりガレ場となってしまう。下山は自由に歩きたくて、一人で気ままに進む・・・。牧ノ戸へ長者原より登る道の長さ、夏は草で通路が狭く、花もまぶ

しく見えた。御池の水で炊飯ができたころを思い出す。久住別れでスキーをし、御池の氷が厚くて、登山靴でスケート。美しい草原に立ち友を待つ・・・、五十年も昔を思う。



(久住山頂にて)

先頭から「たたいま(午後二時五十分)牧ノ戸峠到着」と声が入る。ちょうど沓掛山の手前ここで最後の人、八十八歳の橋本会員を待っている時。宇津宮会員と一緒に声をかけているように。午後三時二十分に全員が登山口にそろい。疲れた中にもみんな満足げな顔。小学生は元気が良い。やがて皆を乗せたバスが

平成一六年 登山記録

児玉章良
佐藤壮悟

今年も百山登ることを年頭に置いた。早速一月四日安心院町の「古笹山(三等)」から始めた。続いて真玉町の「尾群山」、中津市の「三保山(三等)」、本耶馬溪町の「中山(三等)」、耶馬溪町の「上ノ畑山(三等)」、「惣見山(三等)」、宮崎県境の「桑原山(三等)」。二月は佐伯市の「場照山(二等)」、弥生町の「椿山(二等)」、宇佐市の「石井山(三等)」、本耶馬溪町の「合良ヶ岳(三等)」、三重町の「広野山(三等)」、佐賀関町の「高城山(四等)」、宇目町の「赤檜山(三等)」、酒利岳(二等)」。これで新旧大分百山終了。三月は臥竜梅を見に熊本県の「小岱山(一等)」、観音岳(二等)」。四月は宇目町の「上津小野山(三等)」、鷹巣岳(四等)」。五月は熊本県宮崎県境の「二上山(二等)」、榊形山(二等)」、樺木山(鳥岳(三等)」、高城山(月例山行で「ながみず山(三等)」、ふきくさ山(二等)」、蒲江町の「高森山(三等)」、遠見山(三等)」、老久保山(四等)」、萱平山(二等)」、萱場(三等)」、飯焼山(四等)」、石神山(三等)」。五月は「日神山(三等)」、佐伯市の「色利山(四等)」、竜王山(三等)」、神楽山(三等)」、熊本県の「矢筈岳(一等)」、鹿児島県の「矢筈岳(二等)」、諸正岳(四等)」、三重嶽(二等)」、八重岳(一等)」、長屋山(野間岳(一等)」、亀ヶ丘(三等)」。六月は大入島の「遠見山(三等)」。七月は鶴見町の「八ガ久保山(三等)」、殿上山(四等)」、鹿児島県の「稲尾岳(二等)」、木場山(三等)」、辻岳(野首嶽(二等)」、荒西山(三等)」、横尾岳(二等)」、陣ノ岡(高峠(三等)」、狐ガ丘(八月は宇目町の「黒門山」、鳥岳、久住町の「清水山(四

等)」、野津原町の「黒岩(四等)」、宇曾山(四月は宇目町の「上津小野山(三等)」、鷹巣岳(四等)」。五月は熊本県宮崎県境の「二上山(二等)」、榊形山(二等)」、樺木山(鳥岳(三等)」、高城山(月例山行で「ながみず山(三等)」、ふきくさ山(二等)」、蒲江町の「高森山(三等)」、遠見山(三等)」、老久保山(四等)」、萱平山(二等)」、萱場(三等)」、飯焼山(四等)」、石神山(三等)」。五月は「日神山(三等)」、佐伯市の「色利山(四等)」、竜王山(三等)」、神楽山(三等)」、熊本県の「矢筈岳(一等)」、鹿児島県の「矢筈岳(二等)」、諸正岳(四等)」、三重嶽(二等)」、八重岳(一等)」、長屋山(野間岳(一等)」、亀ヶ丘(三等)」。六月は大入島の「遠見山(三等)」。七月は鶴見町の「八ガ久保山(三等)」、殿上山(四等)」、鹿児島県の「稲尾岳(二等)」、木場山(三等)」、辻岳(野首嶽(二等)」、荒西山(三等)」、横尾岳(二等)」、陣ノ岡(高峠(三等)」、狐ガ丘(八月は宇目町の「黒門山」、鳥岳、久住町の「清水山(四

等)」。九月は佐賀県の「牧ノ山(四等)」、「黒岳(四等)」、「宮崎県の「釈迦ガ岳(二等)」、「天包山(三等)」、「直入町の「上野岳(四等)」、「千歳村の「八山」。一〇月は緒方町の「日向山(前天井(三等)」、「院内町の「奥山(四等)」、「対馬の「大鳥毛山(四等)」、「矢立山(三等)」、「洲藻白岳」、「城山」、「舞石ノ壇山」、「権現山(三等)」、「隠蔵寺山(四等)」、「上見坂展望台」、「有明山(二等)」、「清水山(四等)」、「御岳」、「平岳(一等)」、「高麗山」、「宇目町の「椎原山(三等)」、「桃ノ木山(三等)」、「三光村の「台山(三等)」、「本耶馬溪町の「置石山(三等)」。十一月は緒方町の「鳥岳(三等)」、「津久見市の「鉾土山」、白杵市の「タカヅキ山(二等)」、佐賀県の「両子山」、「犬山岳(一等)」、「唐泉山(三等)」、「琴路岳(三等)」、「経ヶ岳(一等)」、「白岩山(二等)」、「御船山(四等)」、「柏山(四等)」、「基山(一等)」。十二月は天草の「次郎丸山(二等)」、「太郎丸岳」、「白嶽(三等)」、「矢筈嶽」、「倉岳(一等)」、「念珠岳(三等)」、「権現山(一等)」、「六次郎山(三等)」、熊本県の日本一の階段のある「大行寺山(四等)」、「矢山

岳」、「あさぎり町の「高山(三等)」、「北岳(三等)」、佐賀県の「国見山(二等)」、「八天岳(三角点は発見できず)」、「大平山(四等)」、「大野岳(二等)」、「岸岳(四等)」、「衣千岳(三等)」、豊後高田市の「鳥帽子岳(三等)」、山香町の「城山(四等)」。今年二人で登りに登って、終わってみれば一七八山。来年もがんばるぞ!!

グリーンデルワル トトレッキング

八重康夫 (その1)

私事になりますが、白内障の手術に、八重剪刀(ハサミ)を考案し、これが全国に広まりました。これは世界でも通用するという(と)で、「Yae Scissor」という名でデビューさせる(と)になりました。そのため昨年九月、パリでの国際学会に出席してきました。初めてのヨーロッパでしたので、かねてから行きたかったスイスのトレッキングに、ついに行きました。山の記録とは少し離れていて恐縮ですが、投稿させていただきます。五年ぶりの海外旅行

しかも単独行動で、時間の余裕もなく、随分あたふたした旅行となりました。九月十七日

仕事が終わってから、午後七時五四分、別府発のソニック号で博多へ。

博多駅前のグリーンホテルに宿泊した。しっかりと寝るため、軽い眠剤を飲んだ。九月十八日

四時三〇分起床、まだ眠剤が効いていて、頭が痛い。博多駅構内の吉野家で食事を取った。

五時五〇分、地下鉄の始発電車にて福岡空港に向かった。六時一〇分、空港のJTB窓口で受付し、成田へ向かう切符などを受け取り、説明を受けた。費用を少しでも安くするため、航空券と宿がセットになっていて、各人が別行動の団体型プランを選んだわけである。福岡で預けた荷物はパリで受け取ることにしたので、少し気になったが、直ぐ忘れた。

七時三五分にANA2142便で成田へ向けて出発。窓際を予約したが、狭くて通路際にすれば良かったと思った。

九時二〇分、成田空港に着いた。初めての成田空港である。海外に行く人であふれている。これから海外に行くんだなという実感が湧いてくる。ここではまだ日本人ばかりであるから楽だったが、久しぶりの出国検査を受けてやはり、緊張した。

待合室で少し休んだ後、パリ行ANA205便に乗りこみ、一時二五分、成田を離陸した。機内は暑くなったり寒くなったりしたので、その度にネックウォーマーをつけたり、借りた毛布をかけた。程なく昼食が出たが、今回は和食にした。動かないのでお腹が空かないから食べ過ぎには注意した。途中睡眠時間のため、機内が暗くなったが、自分は時間の関係上、行きは眠らなくて良いと思っただけで、手もとの映画を見ていた。時間がたつぷりあり、ブラビ主演の「トロイ」とハリポッターの「アズカバンの囚人」の二本も見てしまった。先に、機内の航路の説明画像で飛行機がロシア領上空に飛んでいることを知って、感動したが、飛行機は、日本海を北上し、ハバロフスク上空を通りさらに北上しロシアの北海沿岸に沿って進んできた。映画を見終わった頃(日本時間午後九時三〇分)にはスウェーデンのストックホルム上空だった。高度1000m、機外温度-55℃、時速900km/h。この技術の凄さをあらためて実感した。

機内で二度目の食事が出た。今度は洋食を頼んだ。量的にはあまり多くなくて助かった。その後、コペンハーゲンの北を通り、ブリュッセルの南を抜けてあと三〇分でパリという所まで来た。

今まで地図の上での名前でした。なかなか場所、現実に自分が来ていることに不思議な感動を覚えた。パリ近郊上空から、畑は日本と変わらないように見えた。しかし家はヨーロッパの家だ、日本とは違うと思えた。

日本時間二時三時四五分(現地時間一六時四五分)、ついにパリドゴール空港に着いた。一二時間二〇分の飛行時間であった。やはり遠い。

ドゴール空港では、中の状態がほとんどわからないまま、人の後についていく形で、税関を通り、JTBの現地係員のいるところまで来た。係員に案内されるまま、空港で少し待った後、別の空港から来たもう一組の夫婦と一緒に、車に乗って、ホテルに案内された。その若い夫婦は、イタリアから来たらしいが、荷物が来ずにエライ大変だったらしい。そんなこともあるのかとあらためて知った。

案内されたホテルに泊まるのは、同じ飛行機で成田を出発した人達の中では自分だけだった。スイスに行くために便利が良いように、中心地から少し離れた所にしたのである。駅名はメルキュールパリ・ガール・ド・リヨン、舌を噛みそうな長い名前だ。

ここでも、日本人現地係員がいて、ホテルの説明などをしてくれた。案内員のいる旅行は本当に楽である。自分はこの後から、離団して、個別行動になる

わけだ。もしもの時の、パリと日本の連絡先を書いた紙をもらい大切にしまった。これがあとで随分役立つ。

時計は現地時間です。午後七時を回っていたが、こちらはこの時期、八時くらいまで明かるらしい。日本の九州とは日の暮れ方に二時間くらいの差があるようだ。部屋に戻り、明日の仕事の準備を軽く済ませて、早く寝た。ずっと寝てなかったから比較的スムーズに寝入ることが出来た。

(続く)

平成一六年度 年次晩餐会

西 孝子

一二月四日(土)新高輪プリンスホテル国際館パミール「北辰」の間
JAC年次晩餐会は、長男穂高が東京に住みはじめ、毎年出席するようになる。野口秋人元支部長が故人になられてからでもある。

(一) 一四時より学生部の「ムスタン遠征報告」報告書を求める
(二) 第七回秩父宮記念山岳賞受賞者平位剛会員のアフガニス

タンの報告

(三) 写真展

(四) 晩餐会(資料で感じたことのみ報告)

A、会長挨拶：「百周年について」

B、着席テーブルの数：四六

「祖母山」(テーブルマスター重廣恒夫氏)

C、物故者：五八名(会員番号一六一五から一三四九八までの人)

D、新永年会員：三五〇六より四二九一までの十一名(在籍五十年以上)

E、支部員紹介：東九州支部四名

F、うれしかったのは前岐卓支部長の高木碩男会員が名誉会員に成られたことである。今西錦司先生が支部に来られた時が最初の出会いで、十二支会にさわられたこと等。

G、新入会員代表挨拶(会員番号一三九九〇)

H、メニュー

野菜スティック、古希殿特性前菜の盛り合わせ、鮭の湯葉巻き、鳥胸肉の豆板醬風チエ添え、ひも付きホタテ貝の牡蠣ソース煮、ツブ貝の薄切り山椒ソース、クラゲとキュウリの和え物、たっぷり野菜入りポトフのパイ包み焼き、広州白雲山、大海老の葱山椒香味炒め、牛フィレ肉のステーキ、森林風、にぎり寿司、辛み大根蕎麦、苺のムース、季節のフルーツ添え、雪山飾り、

コーヒー(毎年故今西壽雄元会長夫人今西芳子会員より日本酒の樽酒も)

久方ぶりに会う顔々・・・。会話のうず・・・。来年は百周年記念を兼ねて、一〇月一五日に開催の予定です。みなさん参加して下さい。

分水嶺を歩く 「碓氷峠」

西 孝子

午前四時起床、雨、風の音強し。出発用意もすみ、出ようとすれば、長男「この台風に、電車も動かない。年よりは行くな。」とどなられ、ふとにもぐる。

気がつけば外は静かになり、青空も・・・あわてて通りへ出て、「タクシー」三台目とまると。七時である。東京駅へ一五分で着く。道は木の枝、ごみ、自転車は、横だおし・・・。中央口のみどりの窓口について軽井沢への人を聞けば私が最初である。向こうの駅まで行けば、事業委員会の人がいるはずと、ホームに上れば、いる、いる、二日酔いの顔がニコニコ。
軽井沢駅(新幹線)はスマートである。駅でパンを買い、次

の電車を待つ。会長の参加でみな心なごむ。

国道一八号を(ゆるい坂の上り)新碓氷峠(九五八m)へ、ここより直角に左へ。落ち葉とドングリをふみながら、落葉樹の自然林の中を右足群馬県、左足長野県と、両手のストックをたよりに「待つて」と言うこともなく歩く。

赤いテープが長く風にひらひら、遠くからも見えるようにと・・・。何メートルおきか聞けばよかった。木のクイに定期入れの大きさをぬれないように、ナンバーのついた目印がつけられている。

風強く、落ち葉深く(二〇センチ以上ある)、ふらふらしながら空青・・・、浅間山はガスの中・・・と教えてくれる。その中から雪らしき雨つぶが飛んでくる。右手に妙義山の奇岩怪石がよく見える。バツグンの被写体であるが、遅れてはいけないとガマン。

落葉樹の山道はどこまでも続く。遠くまで見通せる。大分にはこんな長い自然林は残っていないのではなからうかと思うほど長い。

右手は利根川(板東太郎)が太平洋へ、左手は信濃川が日本海へ・・・。日本地図を思い浮かべながら・・・。
途中で別荘の横を通る。ひと屋敷ごとにかこのしかたが異なる。針金のとげに注意しながら

ら歩く。空き缶を下げたところもある。冬で人気はなし。コースの三分の一ほどで家は終わる。

途中で三角点を見つけたが、小さな声で「万歳」と「ヤッホー」と言いやり過ごす。三回ほどの小さなアップダウンで、旧中仙道の碓氷峠(一一二〇メートル)である。見晴台は公園だ。車道に近いので人多し。県境の案内標識もデラックスだ。中心には直径九十センチくらいの杉の柱の小屋で、まわりは座れる。

具だくさんの豚汁二杯で満腹。ご苦労様。有り難いこと。今年のはとくに味がよく、おかわりは初めてである。

毎年この山行を楽しみにしている連中には、みなあいさつ。会長に「一緒に」とお願いして記念写真を写してもらい、来年の再会をちかい、下山。旧軽井沢へむけて歩き始める。前には一人だけだ。

長い等高線沿いの道を進めば、車道を渡る橋あり。やがて、谷が現れて、舗装道路に出た。大木で薄暗く、日光がささないのか、石垣や木の幹が薄みどりの苔色である。旧軽井沢は敷地の区画もはっきりした、分譲地らしきところがあるが、高度成長のなごりで売れてない。
どこまでも大木の自然林がうつそうとして続いている。古い教会、朽ちた家、やがて茶店に着くが、力もちを食べる人もなく、そして軽井沢銀座にでる。

道は、車道は片側一車線で、歩道の方が広い。ビブラムが減るのではないかと思うほど、駅までの道は遠い。途中はみやげの菓子を買っただけだ。ブライダルグッツの店の横に、教会と結婚式受付の看板が目立つ。五時間コースは駅で終わり。晴天を喜びあい、再会を約し別れる。

※ 碓氷峠は広辞苑によると文語形ではウスヒとなつていて、東京へ軽井沢（新幹線片道運賃五七五〇円）

参加者：四十九名

今西錦司 ①

西 孝子

何から知らせるべきか迷った末、地図に赤線だと思つた。計画を頂くと、全部知らない山ばかり。大分県地図と二万五千分の一地図とを比べ、どこに有るのか見当をつけるのが大変だ。三角点も一等から四等までを知つたのも初めてである。特に一等が主目標である。日本全国地図に一等三角点の記した物をいただく。よく見れば本点、補点、増大点の表も一緒である。三角点研究会まであるという。本点については番号があり、北

海道の宗谷岬が一番で、三角の角が本点である。三四六番は沖縄の首里城址である。三角点はこちらまでで、本論にもどらう。

登山計画をいただくと分きざみである。登つたことのない山でも等高線で歩く速さが分かるのである。下見をするが、登山者もなく、道はありませんと返事したこともある。先生は、目的の三角点には行ける。というのを知らない私は、最初の山行から驚くばかり。

九重、祖母、傾まで知れば大分県の山はこれだと思つていた。両ほほを打たれた気分であつた。それ以来三角点参りである。

赤線は山だけではなく、車道だ。来分してコースは決まる。一度通つたら赤線が引いてあり、遠回りして行く指示がある。途中のバス停の名、近くに見える山名と質問せぬ。今西フアンの行列。博士のお通り。

宮崎県の鏡山の時である。行きは延岡方面より一〇号線をとンネルを出て右へ入り、帰りは臼杵に行くため大分県に近い方へ出た。トンネルの近くまでもどるように指示が。まだ先生と二回目の山行で、よく話ができないうつた。 「はい」で方向をかえ、進む。後続の連中が大声で叫ぶがついて来た。「どうして？なぜ？」実は地図の赤線をつなぐためであつた。あとに地図の裏にはコースタイム、メンバー名を記入する。

二万五千を車のスピードにあわせて読み、わずか一キロでも通つた印をつけねば満足しないのである。

こうして日本中を赤線でつないだのである。アフリカの大地を地図に直線を引き、ジープで走つた話をする時の楽しそうな顔。

一回だけ、今日通過した所を聞かれたことがある。県内のピーク名も知らず、はずかしい事。目的の山しか見えない私が、おかげで地図を見て山名を調べるようになつた。これは旅の原点である。

昨年十三回忌をすませた。今頃は天国の山をいくつ登つたろうか？もしかして、宇宙に赤線を引いているのでは・・・？



私の無名山ガイドブック

飯田 勝之

県下市町村の最高峰

昨年秋のある日曜日の午後、あいにくの雨模様で山にも行け

ず、無為に過ごしている時間。インターネットで遊んでいたなら、各都道府県の最高峰のページを見つけた。この時私の脳裏に県下の各市町村ごとの最高峰のことに思いが及んだ。五八市町村の最高峰はどうなっているだろうか？自分はそのうちどれだけその頂きに立っているだろうか？

早速地図を開いて調べてみた。その中で自分がどれだけ登っているかと思えば、中津市と千歳村、清川村、荻町の最高峰には登っていないことが分かった。中津や千歳は考えてみれば、山らしい山のある地形の所ではないので当たり前なことだ。それよりも困つたことがある。最高峰が必ずしも最高地点になつていないところであつた。清川村の最高地点は傾山から三尾を経て下つていく稜線の、派生する尾根の分岐する地点でピークではない。また荻町は熊本県境の丘陵地の畑の中だ。蒲江町もそうだ。

現在の市町村は、ごく一部を残して今年の四月には大合併が完了してその姿を変えてしまう。その前に未登の地に登つておきたいと考えて、訪ねてみた。荻町の最高地点は、近くを通り過ぎる時に立ち寄つてみたが、全く何の変哲もない広い丘の中だつたので、紹介に値しないが、中津市と千歳村について紹介してみよう。

三保山

中津市に山があつたのだ。その最高峰は三保山（一七八・九m）。市街地や国道一〇号線の方から見れば、ゴルフ場の後方に広がる丘である。典型的な里山でありながら、かなりの藪山で、この山には定まった登山道はない。しかし中津市側のゴルフ場の方からと、宇佐市と三光村境付近からと二つが、ヤブこぎルートとして目印のテープがつけられている。

私はかつて大分合同新聞で紹介されたことのある三光村側からのルートを登つてみた。宇佐市と三光村境の峠の少し村側に下つたところに、荒れた林道の入り口があり、その道はすぐ先で崩壊している。その崩壊した崖を登るとヤブの入り口で、目印のテープがあつた。

カシやナラ、ツバキやカエデといった混交林の中を、目印の赤いテープを頼りに斜面を登つていくと、一五分ほどで平らならぬ稜線の上に着いた。ここはもう長く長い三保山の山頂の一角である。あたりは照葉樹と落葉樹の混じつた立派な天然林で、車の音や工事現場の音などが聞こえなければ、ここが里山であることを忘れさせるほど森が深く野趣豊かである。

とはいふものの、私はこの日、別の山が主目的であつたため、うっかりして、三保山のある宇

佐と小佐井の地形図を持参しなかった。「こんな里山、たいしたことはなかるう・」と、唯一持っていた合同新聞の切り抜きだけを頼りに登っていたのである。

平らで広い稜線には、よく見ると古い山道が落ち葉に埋もれて東から西にのびている。それを西に進むと古い道は判然としなくなり、やがてブッシュにいく手を阻まれて、目印も見あたらずなくなった。すぐ左手の方は樹林がなく、稗の細い笹が群生して少し高くなっている。明るいので、どうやらそのあたりに山頂の三角点がありそうな気がして分け入ってみた。しかし、背の高い笹の中をあちこち漕ぎ回るが、いっこうに見あたらない。このようなどころに三角点があるとはとうてい思われな

い。考え、樹林の方へと漕ぎ戻る。すると少し向こうに赤いテープが見つかる。

再び目印のテープを頼りに、西に進む。平らな林内を目印は右に左に木々をかくぐりながら続けている。そして疎林の向こうに明るい広場が見えてきて、近づくとその広場の真ん中に三角点の所在を示す国土地理院の白い標柱が見えた。

三〇メートル四方に広く伐採された広場は、雑草に覆われてまわりは高い木立で展望は全くない。ただそれだけの山頂である。広場の反対側にはゴルフ場

方面からの登路を示すテープがつけられている。

帰宅後地図を見ると、三角点は広い山頂の北西端近くにあることが示されており、地図を持っていけば難なくたどり着ける山頂であった。地図を持たずに踏み込んだうかつさを反省させられた山行だった。

王子山の東峰

千歳村から農道空港に向かう農免道路を進むと、大野町との境界を示す看板が現れる。そのすぐ横に、右(北)の斜面に入る小さな道がある。これが王子山の頂まで続いている林道である。脇に車を止め林道を登る。この道は入り口は舗装されているが、数十mも上ると舗装は切れて荒れた路面になる。

この林道をどンドン登っていく。クヌギの灌木林の中をジグザグ登りて登ると、やがてスギやヒノキの造林地の中の登りとなり、傾斜が緩くなる。山腹を西に向かつて回り込むようになり、再び灌木林のなかを西に緩く登っていくと、農道から二〇分ほどで平らな峠状の所に出る。草つきの林道が斜めにX交差しており、右に引き返すように鋭角に曲がる道をとると、平らな道が続き、やがて緩く下って行き、交差点から数分ほどで、右に分かれ道を見て緩い登りをさらに進むと数分で、再び下り始める。このあたりから右手の笹

ヤブの中に踏み込むと、すぐに平らな山頂に達する。ここが三三九mの標高点のある、千歳村で一番高い地点だが、もちろん何もなく、そこは単なる小さな山の頂きに過ぎない。



(王子宮)

X交差点に引き返し、そのまま右側の道を緩く登っていくと、数分でクヌギ林と笹ヤブの低い地点を右に見て、間もなく明るく開けたところに出る。

向こうには大野町の原野が広がって見える。その一帯が三三七mの標高点のある王子山の山頂で、そこから平らな山頂を南に引き返し気味に、慎重に笹ヤブを分けながら進むと、茂みの中に「王子宮」のほころを発見することが出来る。しかしこの山頂は大野町である。

オススメ映画

「運命を分けたザイル」

西 あずさ

「生きるために歩いているのではない。死ぬときに誰かと居るために歩いている。」
久々に映画のご紹介です。すごい山岳映画がやってきます。本物の山岳映画がやってきます。

ここまでリアリティーを追求した作品は、これからも制作されることはないのではと確信したくなる「運命を分けたザイル」心が痛くなってくるような作品でした。

ペルー・アンデス山脈のシウラ・グランデ峰西壁で起こった実話『死のクレバス アンデス氷壁の遭難』の完全映画化です。真実の力強さ、生々しい現実を、本人達が事実をゆがめることなく語り、忠実に再現した作品です。

若き登山家のジョーとサイモンは前人未踏のシラウ・グランデ西壁登頂に成功します。ところが、下山途中にジョーが滑落、骨折です。ベースキャンプを持たないアルパインスタイルでは、食料もクライミングギアも限りがあります。二人の脳裏に死の陰が近づくと、サイモンはわずかな望みを信じてザイルで確保

して、単独の救出を試みますが、ジョーはバランスを崩し氷壁に宙吊りになります。サイモンからはジョーが宙吊りになっているのを確認できないでいる間に、二人の体力は限界を超え、このままでは二人とも命を落としかねません。二人をつなぐたった1本のザイルを・・・究極の選択を突きつけられます。下にはクレバスが二人を待ち受けているかようです。

決断の時が来ます。大聖堂を思わせる蒼く暗いクレバス、奇跡的に助かったジョーは目を覚まします。「バカ！バカ！大バカヤロウ！冷静でなければならぬクライマーが、泣きながら自分自身を激しく叱責します。「ここで死んでしまうのか・・・」絶望と孤独、死と隣り合わせの状態の中、最後の望みを託してサイモンと結ばれたザイルを手繰り寄せます。

一方、サイモンも、何もしないで自分を憐れみながら死ぬより、行動して死のうらと極寒の中を命からがら下山します。トム・クルーズ主演の企画が持ち上がるなど、何度か映画化が試みられましたが不可能と判断され中止となりました。今回は、リアリティーを追求した作品づくりのため、撮影は、実際に遭難のあったアンデス山脈や、ヨーロッパアルプスで行われました。細部まで克明に再現することにこだわるケヴィン・マク

ドナルド監督は、本物のクレパスに入ったり、マイナス二〇度を下回る猛吹雪の中で、凍結するレンズをシユラフの中で抱いて撮影が続きました。

ドキュメンタリータッチで描かれているので、本人たちが登場します。事故のあった場所を再訪した彼らは、何を物語るでしょうか・・・

四月の上映ですが、詳しい日程はまだ決まっています。是非、原作も読んでみたいものです。

シネマス 097-536-4512

お知らせ



二月月例山行の

ご案内

- ・月日 二月二十六日(土)
- ・目的地 弓ノ木から奥山七福神へ(玖珠町)
- ・出発 午前五時サニー発
- ※四月の定例総会で決められた日程が変更になっていますので注意下さい。

三月月例山行の

ご案内

- ・月日 三月二十七日(日)
- ・目的地 所小野山から伏木峠(日田市)

- ・出発 サニー午前五時発
- ※目的地は変更になる可能性があります(残っている分水嶺に)

四月月例山行の

ご案内

- ・月日 四月十七日(日)
- ・目的地 大窓から大戸越
- ・出発 吉部大船林道入り口 八時集合
- ※前日は筋湯温泉で支部定例総会となっていますので、現地集合とします。

支部定例総会

のお知らせ

- 東九州支部の定例総会は、次の日程で開催の予定となっています。詳細は別途葉書でお知らせしますが、日程だけは空けておいて下さい。(西 孝子)
- ・日時 四月一六日(土) 午後六時より
 - ・場所 筋湯温泉「八丁原ビューホテル」
 - 九重町筋湯七三九
 - TEL 09737-9-2234

役員会のお知らせ

- ・日時 三月八日(火) 一八時三〇分より
- ・場所 大分市「コンパルホ

「ル」六〇一号室
※役員でない方もお近くの人はおいで下さい。(西 孝子)
(各役員には改めてお知らせは致しませんので、お忘れないうちにお願ひします。)

分水嶺踏査第三班からの連絡

第三班担当の分水嶺踏査は、残っていた立羽田峠、弓の木間を二月二日(日)、三班員の石川さんに、他班から中野さんの加勢を受けて終了しました。

班員で都合により行けなかった方もあります。分水嶺踏査は出来るだけ多くの方の参加との考えから三班担当区域の内、一番困難でないコース 野平峠、中の原山間の約三キロにつき次により再度踏査を実施しますので、参加をお願いします。(扱い園田)

- ・日時等 三月六日(日) 大分市サニー・スポーツ集合。午前六時出発(雨天の場合の予備日 三月一三日(日) 集合場所出発時間同じ) (終了は現地午後二時頃を予定)
- ・参加する場合の連絡先 大分市園田方 TEL 0977-5461-2569 (19時〜22時の間受付) (携帯) 09045875987
- ・その他 参加者があまりに少ない場合は、中止もあります。

後記

今回は発行直前に原稿が殺到し、編集者としては嬉しい悲鳴です・・・

原稿が増えればそれだけ仕事も増えるけど、それだけ会報の内容も増えるので、編集者の楽しみも増えます。

また「そのために発行が遅れた」と、言い訳の材料もできました。二重、三重に感謝します。

前回発行の支部報(二十七号)の「お知らせ欄」十二月月例山行のご案内の中で、「酒呑童子山」を酒呑み童子山としたままで、校正も見落とししました。

これは単なるワープロ操作ミスでした。ところがこれを編集者のウイットと評価して下さる声があり、二、三ありました。

庭にあるモチの木やセンリョウの赤い実は、この時期の寂しい庭に、いつも花に代わって彩りを添えてくれていました。

しかし近年、この実が正月を待たずに半分無くなり、一月終わりにはもう全く無くなるようになりました。

ヒヨドリなどの山の鳥たちが来て食べてしまうのです。

これは山の食べ物が少なくなつたため、街に来て餌をあさっているからでしょうか?

暖冬の予想を覆して寒い冬となつています。山は例年以上に雪が深いようです。鳥たちも冬を過ごすのが大変でしょう。

印刷のための、メールによる原稿の送付の手違いで、発行が定期発行日より大幅に遅れてしまいました。たことを、皆様にお詫びします。(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第28号

2005年(平成17年)1月25日(火)

発行者 梅木 秀徳

編集者 飯田 勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八